# 2.　Excel関連の基本的なサブルーチンや関数

　JuseOffice.vbsで定義しているサブルーチン、関数にはいろいろありますが、その中のExcel関連で基本的なものについて解説します。

　まずは sample01.wsf は基本中の基本なので少し詳しく記します。

　sample01.wsfの主要部分を改めて掲げます。

[ワークブックを開く] "sample01.xlsx"  
[ワークシート].Range("A1").Value = "Hello"  
[ワークブックを保存]  
[エクセルを終了]

## (1)　[ワークブックを開く]

　文字どおりワークブックを開くためのものです。

　引数として "test.xlsx" などのファイル名を指定します。

　"C:\work\test.xlsx" のようなパス名でも大丈夫です。

　そのファイルは、存在していても存在していなくてもかまいません。

　つまり、新規作成でも既存のファイルのオープンでも、どちらでもOKです。

　この「開く」でファイル名を指定しておくことであとで [ワークブックを保存] のときにファイル名を指定しなくて済みます。

　Excelの起動は、暗黙のうちに行うので意識しなくて大丈夫です。

　ワークブックを開いたあと、次の二つのグローバル変数がセットされます。

* [ワークブック]: 開いたワークブックのオブジェクトがこれにセットされる。
* [ワークシート]: アクティブなワークシートがこれにセットされる。

　なお、[ワークブックを開く] はワークブックオブジェクトを返します。

　なので厳密にはサブルーチンでなく関数です。

## (2)　[ワークシート]、[ワークシートを切り替え]

　[ワークブックを開く] の後で、変数 [ワークシート] にはActiveSheetのオブジェクトがセットされます。

　なので、[ワークシート].Range("A1") のように書けます。

　ワークブックに複数のシートが含まれている場合、ActiveSheetが第1シートであるとは限りません。

　確実に第1シートを扱いたいときは [ワークシートを切り替え] 1 という1行を書きます。

　そうすれば変数 [ワークシート] に第1シートがセットされます。

　[ワークシートを切り替え] の引数には数値以外に "Sheet1" などの文字(ワークシート名)を指定することもできます。

## (3)　[ワークブックを保存]、[ワークブックを別名で保存]

　[ワークブックを保存] は、あらかじめ指定されていたファイル名でワークブックを保存します。「上書き保存」に該当します。

別の名前で保存したいときは [ワークブックを別名で保存] "work.xlsx" のような1行を書きます。こちらは「名前を付けて保存」に該当します。

　別名で保存した場合、その別名がデフォルトの名前になります。

　なので、次に[ワークブックを保存] を実行すると、別名の方で保存されます。

## (4)　[エクセルを終了]

　[エクセルを終了] は、すべてのワークブックを閉じてからExcelを終了します。

　その際い、ワークブックの保存の処理はしません。無条件にCloseします。

　GUI操作しているときと異なり、Excelアプリケーションはワークブックをすべて閉じても終了しません。

　なので、明示的に終了させる必要があります。

　これを忘れると VBScriptが終了した後も Excelが起動したまま残ります。

## (5)　[エクセル]

　サンプルスクリプトには出てきませんが、 [エクセル] という変数には Excel.Application がセットされています。

　[エクセル].ActiveWorkbook とすればアクティブなワークブックを得られ、 [エクセル].ActiveSheet とすればアクティブなワークシートを得られます。